

「けなげ」の多義性

——ジェンダーから見る「ネル」再話——

佐藤 宗子

千葉大学・教育学部

The Ambiguity of Kenage :

Gender Bias in the Japanese Renderings of "Little Nell"

Motoko SATO

Faculty of Education, Chiba University, Japan

児童文学の翻訳・再話における「子ども」観の反映として、「けなげ」という概念に注目する。一方で「いたいけ、いじらしい、あわれ」といった心情に根ざし、他方「気高さ、強さ、勇気」といった行動を伴うようなこの語は、児童文学の中で多様な働きをしている。その概念が「少女」主人公と結びついた翻訳・再話における例として、ここではディケンズ『骨董屋』に基づく「ネル」再話をとりあげ、とくに三人の再話者の姿勢を検討対象とした。感傷性から離れた方向への再話化の努力がそれぞれに見られるが、反面、それが同時に「けなげ」な「少女」の造型を規定しがちでもあること、作品の周辺情報が享受者に影響を与える可能性もあることを指摘し、またドストエフスキー『虐げられた人々』に基づく別の「ネリー」再話との関連性についても研究の可能性を示唆した。

キーワード：児童文学 (children's literature)、翻訳 (translation)、再話 (adaptation)、ジェンダー (gender)、けなげ (Kenage)

一

児童文学においてある作品が翻訳・再話されるときに、その訳者・再話者の「子ども」観が、訳出・再話作品に強く反映されることは、これまでの研究からも明らかにされてきた。そうした「子ども」観は、作中人物（とくに主人公）の人物造型や、作中でのさまざまな描写にあらわれるのみならず、はしがきやあとがきなど作品の周辺で提示される場合もある。またはそもその再話作品が出版されるシリーズの体裁等から、事前に示すべき「子ども」観が規定されることもあるし、逆に、再話にともなって仕立てられる表紙絵、挿絵などあいまって、効果が発生することもある。

こうした翻訳・再話における「子ども」観に関わり、私は、最近「けなげ」という概念に注目している。一方で「いたいけ、いじらしい、かれん、いたましい、あわれ」といった心情に根ざし、他方、「気高さ、強さ、たくましさ、勇気」といった行動をともなうようなこの語に、児童文学における「子ども」への期待が、多様でありつつも端的に、集約されているのではないかと考えるためである。

その期待に、「子ども」の性差が関わることがあるのではないだろうか。原作そのものがはらむ問題ももちろんあるだろうが、訳出・再話の過程で、「けなげ」の捉え方にはどのような可変性とその限界がみられるのか。

そうしたジェンダーの観点に立った再話研究として、今回は、ディケンズ『骨董屋』に基づく「ネル」再話を扱うこととする。もともと原作自体が感傷的との批判

も受けた作品であり、中心人物が「少女」で、最後は「死」を迎えるこの長編は、むしろ、相当程度短くされた少女向けの再話作品として、日本では普及したといつてよいだろう。訳題にももっぱら「ネル」の名が使われがちであるこの作品は、どのようなジェンダーの問題を提起しうるのであるのか。本稿では、「けなげ」の多義性を追究する一環として、「ネル」再話をこの点に絞って考える。

まずは、児童文学における「けなげ」と「子ども」観の関係について概括し、『骨董屋』ないし「ネル」について、また日本における「ネル」の受容について大まかに確認をしたい。その後、羽仁もと子、松本恵子、池田宣政の再話作品に焦点をあてていく。

二

(1)

「けなげ」と「子ども」観は、いったい、どういう関係にあるのか。すでに一度、この問題については検討したことがある（「けなげ」への思い——翻訳児童文学の「子ども」像、『日本の美学』三四号、二〇〇二）。それに適宜言及しながら、とりあえずの確認を行っておきたい。

児童文学においては、しばしば、主要登場人物、とりわけ主人公の子どもがいかに造型されているかに評価のまなざしが注がれがちとなる。たとえば自身も作家であり翻訳者でもあった安藤美紀夫は、一九七〇年代半ばに、座談会「世界の児童文学の中の日本児童文学」で、「環境に積極的に働きかけて、それを何らかの形で、変えていく姿勢を持つ、そういう子どもがやはり主人公としてはふさわしい」と述べ、それは「子ども観とも関連するだろう」との見方を示した（日本児童文学者協会編『現代日本児童文学作品論』、すばる書房盛光社、一九七五）。ここには、第二次大戦後、いわゆる「現代児童文学」が発刊期以来掲げた理念が如実に反映されているといつてよい。

しかし、実際に多くの子ども読者の手にわたった作品群が、どのような「子ども」を提示していたかといえ、それは安藤の理想とは異なつてこよう。トム・ソーヤーやエミールよりも、マルコやレミ、ネロといった少年たちのほうが、翻案や抄訳、再話などさまざまな形をとりながら、明治期以降、二十世紀後半にいたるま

で、長く親しまれ続けてきた。版を重ねる再話、あるいは再掲載、そして新たな訳者・再話者の出現……といった事象は、単にそれらの訳者・再話者たちにとどまらず、その作品を次世代の子どもたちに読ませたいとの、広く一般に共有された望みがあつてのこと、と理解すべきだろう。そして、ここで詳述のいとまはないが、たとえば前掲の少年主人公たちの性格設定や行動から浮かび上がるのは、「けなげ」の一語である。一方でどこまでも向日的でありながら、他方、哀切のきわみでもある——そんな両義的な概念が、結局は対象となる読者の少年にも少女にも、差し出されてきた。全般的にいうなら、性別に関わらぬ「けなげ」の両面を、子ども読者はあわせて享受してきたといえる。

もっとも、これには反論も予測される。マルコやレミ、ネロは、なるほど普遍的な「少年」主人公たちであつた、だから「けなげ」の両面がうかがえるのだ、と。すなわち、「けなげ」が「少女」と結びついたときには、哀傷の面のみが、浮き立つのではないか、というわけである。少年少女双方を読者対象にした「名作」や「全集」のほかに、「少女」に限定した形のそうした出版も多くなされてきたことを思い合わせれば、確かにこの疑問はなおざりにはできない。

はたして、「少女」が主人公であり、また主たる読者対象でもある再話において、「けなげ」はいかなる様相を呈するのか。その格好の素材としてとりあげたいのが、「ネル」再話である。

(2)

チャールズ・デイケンズ『骨董屋』The Old Curiosity Shop（一八四〇〜四一）を、主要登場人物のネルに焦点化するかたちでまとめられた作品（群）を、ここでは「ネル」再話と呼ぶことにしたい。原作は、ペンギン・クラシックス版で本文五五〇ページ近くの長編である。ただ、その文学的評価は、彼の他の作品と比べて、必ずしも芳しいものとはいえない。

たとえば、ジョージ・サン普森『ケンブリッジ版イギリス文学史Ⅲ』（平井正穂監訳、研究社、一九七七。原著刊行は一九七〇）を繙いてみよう。デイケンズに関して「よく言われる非難」として「センチメンタリズム、および、盛りだくさんのペイソス」を認める著者は、その理由をデイケンズが同時代読者の「一般的傾向に忠実に従って作品を書いた」ことに求め、明白な例として、少女ネルが作中で

死んだとき、「涙が津波となつて英国の島々を洗い、大西洋を渡った」という有名な話をあげる。そして、付け加える——「われわれ現代人は、ディケンズの琴線を震わすペイソスを好きになれないのだが、われわれの父祖たちは好きになれたのである。」と。

さらに著者は、原作に辛辣な評を下す。この作品で「注目に価する点といへば、大変有名だが議論の余地のある二人の人物、すなわちネルとその祖父さんとは、何か話題の種にする場合を除けばほとんど無視してよい、という事実であろう。」と断ずるのである。これに対し、「その他のほとんどすべての登場人物——（略）——の描き方は実に見事である。」ともいう。

これは、試みに英国図書館の目録（B L P C）をインターネット上で検索するだけでも傍証を得ることができる。「little Nell」で拾い上げられる五八項目の多くは、本作品関連の再話や歌であるが、一覽で見ると二十世紀前半までに刊行されたものである。つまり、刊行時は熱狂的に、その後も一定の期間は広く受け入れられていた、ネルと祖父を中心とする「ペイソス」は、いまやまったく見捨てられ、同じ作品の中でも別の要素が、むしろ認めるべき点となった、というわけである。

それでは、日本では、『骨董屋』は、または「ネル」再話は、どのように受け入れられたのか。

(3)

「ネル」は、すでに明治期に移入されている。『明治翻訳文学全集（新聞雑誌編）第六巻 ディケンズ集』（川戸道昭・榊原貴教編、大空社、一九九六）にも収録されている、前田梅城「逝きにしネル」（『新声』一九〇五年七月）が、現在のところ最も早い紹介といえるのだろうか。

もつともこれは、少女ネルの運命をたどった「ネル」再話ではなく、表題の通りの、臨終とそれに続く場面を切り出して五ページに仕立てた作品で、「彼女は死んだ。」といきなり始まるだけに、一幕の愁嘆場を味わうことはできても、物語としての享受は困難である。

同集所収の「明治翻訳文学年表」には掲載されていないが、そうするとそれから二年後の一九〇七年十月に「少女文庫」第一編として刊行された『ネルの勇氣』（羽

仁もと子編輯、愛友社・内外出版協会）が、今のところ「ネル」再話の嚆矢ということになるか。（本再話については後に取り上げる。）

あるいは雑誌掲載、または翻案等で大きく訳題が変わったものなども途中あるかと思うが、次に目立つのは、一般向けだが松本泰・恵子共訳による「ヂッケンズ物語全集」の第四巻として刊行された『少女瑠璃子』（中央公論社、一九三七）である。巻末に原名との対照表がつくが、作中人物は皆日本名の半翻案である。この訳者の一人、松本恵子は、第二次大戦後に今度は翻訳形式の児童書として、『孤児ネリイ』（湘南書房、一九五〇）を、さらに拡充して『さすらいの少女』（『世界名作全集』一四九、講談社、一九五六）を出す。湘南書房版の本扉の記載からは、英語圏でのダイジェストを底本としたらしいと推測されるが、彼女のこれらの仕事は、他の「ネル」再話を喚起したことは間違いあるまい。

管見の範囲でも、一九五〇年代には、児童文学でいくつかの「ネル」再話が出そろい、それらのいくつかは六〇年代にも、ものによっては八〇年代にまでも、版をかえて世に送り出されていることがわかる。簡略に記せば、次のようである。

一九五一 池田宣政『少女ネル』（『世界名作物語』ポプラ社

↓六八（『世界の名作』一七）同

五二 村岡花子『少女ネリー——ディケンズ名作物語——』（『学校図書館文庫』

三三）牧書店

↓五八（初版は五七か）『世界の文学 小学六年生』あかね書房 所収

の「少女ネリー」

※ なお、未見ながら戦前にもすでに村岡再話はあったらしい。

五三 喜多謙『少女ネルの死』（『世界名作文庫』四〇）偕成社

↓六五（『少年少女世界の名作』三九）同

↓八三（『少年少女世界の名作』九）同

五三 長谷川幹夫編『孤児ネル』（『世界名作物語』三五）黎明書房

五五 伊吹朝男『少女ネリー』（『学級文庫二、三年生』）日本書房

↓六一（『学年別世界児童文学全集二・三年』）同

↓六五（『学級文庫の二、三年文庫』三〇）同

↓八四（『小学文庫小学二・三年向』）同

五八 新川和江編著『さすらいの少女』（『世界少女名作全集』三）偕成社

↓七二(「少女名作シリーズ」二) 同

七五 おのちゆうこう『さすらいの少女』(「マーガレット文庫 世界の名作」)

九 集英社

このほかに、五〇年代にマンガ版二点、六二年に絵小説一点があり、とくに一九五〇年代以降、「名作」と認定されていた様子が窺える。ただし、他のディケンズ作品の翻訳・再話と比べれば、決して多い点数とはいえない。

松村昌家「ディケンズの翻訳の歩み——子どもの読物としての側面を中心に」(子どもの本・翻訳の歩み研究会編『図説 子どもの本・翻訳の歩み事典』、柏書房、二〇〇二)でも、とくに『オリヴァー・トウィスト』や『クリスマス・カロール』に説明を多くさいており、「ネル」に関しては、一切触れられない。それだけ、訳出状況の総体から見れば、比重が小さいということである。

一般向でも完訳は遅く、北川悌二訳が七三年に刊行され(三笠書房)、後ちくま文庫に上下二巻で収録された(八九年)。同文庫「解説」で長谷部史親は、『骨董屋』は「『読まれざる名作』のひとつ」と述べているほどである。

こうしてみると日本では、本国でかつて見捨てられたネルと祖父をめぐる「ペイソス」の部分が、「ネル」再話として、二十世紀後半に、主として少女向け名作として一定の普及を果たしたとみることができる。原作の「ペイソス」は、どのようなかたちとなって日本の(少女)読者に提示されたのか。松本恵子、羽仁もと子、池田宣政の、それぞれの再話に対する姿勢を順次見ていくことにしたい。

三

(一)

松本恵子訳『孤児ネリイ』(以下、湘南書房版)の本扉には、「LITTLE NELLY / from / The Old Curiosity Shop / by / Charles Dickens / Collins' Clear-Type Press / London & Glasgow」とのみ記され、訳題はない。カラー扉に日本語題名があるから不要との判断もあったのだろう。だがそれだけでなく、ダイジェスト版英語テキストの存在を示すことで、恣意的な再話と見られることを避けたかったのかもしれない。挿絵を入れて正味二四三ページの本文は三二の小見出しに分けられている。

一方、「世界名作全集」収録の『さすらいの少女』(以下、講談社版)は、本文二九七ページ(挿絵込み)と、少し分厚い。一応、湘南書房版をもとにしてはいるが、文章表現の手直しのほか、四章立てとなり、その第四章の小見出し「一三のうち一」が、新たに加わった部分となっている。うち一つは後日譚的な最終小見出しで、それ以外の、第四章冒頭から連続する十の小見出し部分が、集中的に補足されたわけである。

何がその違いかといえば、要は、湘南書房版で省略されていた、キルプの悪計でキットが捕われる一連の展開が復活した。第三章の末尾では(最終小見出しは「春を待つ小鳥」、すでにネルと祖父は逆境の旅路を終え、老校長の配慮のもと、穏やかな日常の場を得ている。「白ゆりの花のような、美しく気高いネル」は、床に臥せりがちとなり、暗黙のうちにネルも周囲も死を予感した状態で、彼女は、「(略)もう一度、キットに会えるときがくるかしら? (略)」とつぶやく。こうなれば、あとはキットの側に立ち、どの時点で「間に合わなかった」悲劇が書かれようとも、実は物語の大枠としては大差がないといえよう。ネルは最終的に天国でやすらう運命を甘受する。脇役キットが間に合わなかった事情がいかなるものであったかは、むしろ許容される再話の分量に応じて可変となる——というのが、再話者・松本恵子のとった立場である。

両再話には「まえがき」(湘南書房版)、「この物語について」(講談社版)が付されており、その解説内容も前半は概ね踏襲されている。つまり、本作品の原作のなかでも「やはり少女ネルの物語が、いちばんあなたがたの胸をうつ」(講談社版)。だが、後半は差異が見られる。湘南書房版では、ネルのモデルが夭折した義妹メイリイであることに触れ、ディケンズが彼女に対する「かぎりない愛情となつかしい思い出をこめて書いた」物語であると紹介する。これに対し講談社版では、「なにがネルを不幸な、悲しい身のうえにしたか」を問う。「ネルは美しくて、心のやさしい、勤勉なほんとうにりっぱな少女」で、「けっして不幸な身のうえなどになるはずはなかった」のだから、と。松本は、その原因をひとえに「祖父のばくちくせ」に帰す。日本でも同様な状況があることを指摘し、最後は「どうか世の中が、そういう誘惑にかからないように祈りましょう。」としめくくる。

いずれも、直接「ネル」再話の物語構成については言及していない。だが、それでいて、少女ネルの「けなげ」さについては各再話の基本姿勢を読みとることがで

「けなげ」の多義性

きる。湘南書房版では、乙女の死を哀悼することが物語の前提に置かれ、ネルは愛惜の対象となる。講談社版では、第四章の追加部分などあいまって、(キットに象徴される)善良さもままならぬこの世の汚濁の中で、孤高を貫くネルが強調されやすくなる。

松本恵子の再話は、相応の分量を確保し、意図的な改変をめざしているわけではない。それでもなお、ネルの「けなげ」が、哀れの方向に傾きがちに思えるのは、むしろその原作尊重ゆえにネルと祖父にまつわる「ペイソス」が純化されてくることに加え、題名に「孤児」「さすらい」と、寄る辺ない心細さを含意した語を用いた効果が出てしまったためだろう。デイケンズ紹介者としての松本の位置を思い合わせるなら、これが「ネル」再話の基調をつくったと考えられるのである。

(2)

題名に関していえば、最初期の羽仁もと子による再話ほど、意表をつかれるものはないだろう。単に「ネルの勇氣」とだけ聞かされたなら、たまたま同名主人公だが別の物語では、とさえ思うかもしれない。

羽仁の見方は率直に示される。冒頭、「愛する少女諸君よ、」(注・「少女諸君」に「みなさま」とルビ)という呼びかけで始まるまえがきが置かれるが、ここで彼女は「ネル」の運命を簡潔にまとめた後、「強い子供とはこのような子供をいふのです。」と断言する。さらに「善いことのために勇ましく、種々な苦しみと戦ふことのできる人を勇氣ある人といひます。」と続け、「よい人になるためにはドンナに苦しくともよいと思つたことは是非ともするといふ勇氣がなければなりません。」と、読者に訴えかける。ここでのネルは、読者である日本の少女にとって、己が人生の範とすべき存在である。それが、本再話の「けなげ」さを、はつきり「勇氣」に置き換えた理由だろう。本文は三五ページ分、しかも一ページは約二二〇字と、分量もぐんと少ない再話本体は、物語を楽しむにはやや説明的に過ぎる。それでも、旅の途中で出会う人々や、キットやクキルプのその後までを盛り込んでおり、物語そのものはむしろ改変しないようにとの意識をうかがうことができる。

つまり、羽仁再話の最大の特徴は、あくまでも「勇氣」の提唱にある。これは、松本恵子による「ネル」再話を標準としてみるなら、相当な逸脱ともみえかねない。だが、実際に目を通してさほど違和感を覚えないのは、たしかに少女ネルは「勇氣」

と呼んでもおかしくない要素を備えているためだろう。前述の松本再話からの引用にも出てきた「気高さ」とも重なるし、羽仁のようにかなりの短さでネルの足跡を追えば、必然的に移動してゆく行動力が力を増したかたちになってくる。

ただ、その一方で、違和感を覚えないもう一つの理由にも思いあたる。どれだけ「勇氣」を強調されようとも、やはりネルは短命の人生を変えられなかった——そのこと自体の哀れさやむなしさの感覚が、読者の心にわきあがり、「けなげ」の別の面の情感に浸される。

おそらく羽仁自身は、「死」の捉え方が異なるのだろう。まず、まえがきでもネルは「朝も夕も天の使の夢を見ながら、安らかに天の栄にいました。」と説明する。本文中ではやとと住居を得た後、真夜中にネルが「天ひらけて、輝く面ての天つ使が、己が眠りを見まもりつ、羽うち交す響の聞ゆるような夢」をしばしば見る。臨終の際には、「神様はあなた方を恵んで下さいますよ」と夢の中に希望の一言を残しつつ、にこやかに神の国に入^レった。さらに羽仁は、奥付直前のページに、「尤も大なるものは愛なり(哥林多前書十三章)」という一行をわざわざ載せている。キリスト教信仰を前提にすれば、ネルの姿はまさに称揚すべき典型となるのかもしれない。だが、読者となる「少女」一般を想定するなら、信仰を共有し得ない者が多数だろう。その立場からすれば、ネルは従順な諦念の持ち主ともみえなせる。そのとき、再話者の意図があるいは裏切^レつて、ここにおける「勇氣」は、「哀れさ」の影を色濃く宿することになるのではないだろうか。

(3)

池田宣政の名作再話については、以前にも検討対象に取り上げたことがある。

「名作再話の確立——池田宣政の三作品を通して——」(千葉大学教育学部研究紀要「四三巻Ⅱ、一九九五」)では、『家なき児』『母をたずねて』『小公子』の三作品の再話について、手法の共通性などにふれた。また、「結末の意味——『フランダーズの犬』の再話にみる——」(千葉大学教育学部研究紀要「四七巻Ⅱ、一九九九」)では、ハッピーエンドに改変された『フランダーズの犬』再話での人物造型の変化などを指摘している。その池田は、どのように「ネル」再話を手がけたのか。(一九五一年版が六八年版に踏襲されているので、基本的に版の違いはない。)

端的にいうなら、ネルは生き返らない。即ち、原作の展開に沿った再話である。

本文二八七ページで小見出しは四七と、かなり細かく区分けされているが、原作にある冒頭の語り手「わたくし」の登場も、そのままに生かされる。そして、四つめの小見出し「悲しき愛の花束」の後半で、ネルが生涯を終えたことまでを先に述べ、読者に対する「わたくし」のメッセージ——なぜネルの生涯を語るのか、それをどう受けとめてほしいのか——を、直接、しかも比較的長く伝える。四百字原稿用紙で二枚を越すほどの長さだが、次に多少引用しておこう。

ネルと祖父の「ふたりの悲しい一生のこと」を聞いた「わたくし」は、「涙がながれてたま」らず、「この悲しい少女の一生を皆さんにおつたえしたいと思つて、すぐにペンをとりあげ」、「できあがつたのが、この物語」だという。祖父の世話をしつつ「悲しみにうちひしがれることもなく、いつも心にあかるい希望とめぐみぶかい神にたいする信仰の光をうしなわず（略）あわれな、けれど雄々しい美少女ネルのまじかい一生の物語」である。同時に、「人の心の美しさ、あたたかさを、氣品のたかい花のかおりのごとくに、読む人の心にしみこませる、とうとい、きよらかな一生」でもある。これを読む読者には、ネルへの「思いやりの涙をながすだけでなく、すすんでこの世の中の貧しい人々やふしあわせな子供たちが、すこしでもしあわせになるようにしてあげてください。」と要望する。そうすれば読者の涙はむなしくならず、「この世をかざる愛の宝玉」「人々の心をてらすよるこびの光」となる、というのである。

つまり、このあと残り四三小見出し分の物語は、一貫して語り手「わたくし」のこのまなざしを通していることがはっきりする。念のため確認すれば、これは再話の物語中での、語り手「わたくし」のメッセージである。もちろんそこには、再話者・池田の思いが重なっているものと考えられるが、すべてをなまな言葉と思うことはできない。

実は、「この本を読む人に」（五一年版。六八年版では「はじめに」というまえがきがあるのだが、そこで池田は、原作者ディケンズを紹介し、彼の傑作として五作品の題名を挙げながら、当の「ネル」に関しては全く言及していない。他の名作再話におけるまえがきなどと比べていえば、池田自身の原作への共感が薄い中での再話行為であったと思われる。恐らくは、ネルが運命に翻弄されて死に至るような「悲しい一生」であることが、池田の意に染まぬ理由であらう。では、池田はどこまで、創意を試みたのか。

生き返らせはしなかったとはいえ、彼は、ネルの人物造型に一つの特徴を加えた。逃亡の旅の途中、彼女は積極的に働く。小見出しのなかにも「働くよるこび」があるが、原作でジャーリー夫人を手伝う程度をはるかに越え、ときに楽器を奏で、稼ごうとする。（略）音楽をきかせて他人をよるこびせ、そのかわりにお金をいただくのなら、ちつともはずかしいことはありませんわ。（略）と、堂々と主張するネルは、旅芸人のレミヤ、働く意志を持つ少年にかえられたネロに連なる少女として、注目すべきだろう。だが、ネルは、それ以上に運命を変える力を持たされることはなかった。

かわつて、この「ネル」再話の後半、衰弱してゆくネルを後景にして、前面に押し出されたのが、キットである。もちろん原作でもキットは、ネルの行方を追おうとするが、そこでは前述のごとくキルプの罠にはまる被害者であり、打開の行動をおこすのは周囲の大人たちである。ところが池田の再話では、悪だくみにははまらず、キルプをうまくかわし、ネルのもとへとひたすら急ぐキットの旅が、かなり綿密に描き出される。途中、ネルの様子を挿入しながらの手法も含め、これは明らかに、準拠している——『クオレ』所収の原話に手を加え、マルコの途上を書きこんだ、『母をたずねて』の再話に。そう、池田は、キットを行動的に書きかえることで、「ネル」再話後半を「少年」の物語に変えたのである。

主体的に働く「少女」ネルと、大人の悪知恵にも負けぬ「少年」キット。どちらも、「けなげ」の前向きで行動的な側面が強化された、人物造型がいかに池田らしい再話となった。しかし、ここでもやはり、その努力を覆すように、ネルは「けなげ」の哀感を帯びざるを得ない。働く意志を見せても、結局それは運命を変えるほどの力とはなり得なかった。作品前半での語り手による「悲しい一生」という括りは、読者のネルに対する見方を規定しがちである。物語としては功を奏したといつてよいキットの造型および描写は、同時に、「少年」ならではの行動力と可能性として、逆にネルの無力さを暗示することになる。

唯一、命を救われたのは、祖父である。「ネルの臨終の美しく気高くおだやかだった」こと、また落ち着き先の修道院長（これも多少の設定変更の結果である）の教化により信仰心に目覚めた老人は、墓参りに訪れたキット母子をネルの墓標である花の十字架へと案内する。大空の青さにネルのまほろしを見、陽光に彼女の心を重ねるキットの思いで閉じられる物語は、「少女」の「けなげ」をくみあげうる

のは、結局は身近な男性たちであるという結末に帰着したのであった。

四

松本恵子、羽仁もと子、池田宣政の三人の「ネル」再話について、簡単な順次特徴を検討してきた。あるいは、原作自体がネルの死で終わる以上、どうやっても哀れさに傾くのは仕方のないことではないか、との疑問も出されるかもしれない。だが、そのことを含めて、「少女」と「けなげ」の関係性をもう一度まとめて把握したい。

「死」に至る運命を変えられぬ登場人物に対して、読者は、歯がゆさを感じることもできる。または、そこにどうしようもないやりきれなさを覚えれば、作品と向きあうことを放棄することもできる。だが、数々の「ネル」再話を前にするとき、そこから浮かび上がるのは、むしろ、何がしかの不満を自分なりの工夫で解決しながら、なんとか読者の前にこの「少女」をひきあわせ、強く印象付けたいという再話者の意識——ときによっては熱意——である。「やはり」死んでしまうけれど、同時にそれでも「やはり」、「けなげ」さに胸打たれる——そうなるべく、仕上げが施されているのである。その「やはり」という部分に、「少女」という属性の限界が隠されているのではないか。祖父と逃げつづけ、隠遁生活の中で病死するのが「少年」であつたなら、そこまで確信を持って、「けなげ」を謳いあげられたらどうか。

となれば、それぞれの再話者たちの、あるいは気高さに、勇気に、自立性に重きを置くなどの再話行為の努力が重ねられ、「けなげ」の多義的な描写としてそれが実を結ぶほどに、皮肉なことながら根本で、「少女」にとつての「けなげ」さはある意味で単純化される。前向きな傾向を帯びた「けなげ」の諸相は、すべて、その分だけの感傷や哀憐の情をはらんで提示され、それが「やはり」という期待の枠内で、読者に享受される。

そうした読者の予測を容易に立てさせるのが、作品の周辺にある情報、たとえば題名や表紙絵となるだろう。先の節で掲げたように、「ネル」再話の多くは、「ネル」乃至「ネリー」という「少女」に、「死」「さすらい」「孤児」といった語がまとりつきやすい。

また、図書館等で検索すると直ちにぶつかるのが、もう一つの「ネリー」再話とのからみあいである。ドストエフスキー『虐げられた人々』に基づく、少女ネリーを主人公にした再話も、実は、一九五〇年代何点か見つけられる。

おそらく、中村白葉訳『みなしごネリー』（『世界名作文庫』、同和春秋社、一九五一）が、その最初であろう。「世界少年少女名作選集」一〇として同社から五四年に刊行された版には「解説」が付けられている。そこで中村は、ロシア文学のなかから孫の世代に語り直す試みの一環として、ドストエフスキーからは「名作」『虐げられし人々』の中から一部をぬいて、この『みなしごネリー』をまとめたという。もともと、ディケンズ『骨董屋』に影響を受け、だからこそ名前も同じネリーが選ばれた作中の少女は、しかし、「ひねくれた、病的な性情」である点は「ネル」とは異質である。そんな彼女に対する青年ワーニヤの導きこそ、中村が「むねのつまらぬような思い」を感じた大きな素因であろう。少女が死を迎える点は、「ネル」とかわらない。ただし、「ネリーの死は、決して悲しい死ではなかった」と彼は言う。他の女性登場人物、ナターシャの家族回帰があつたのだ、と。

ドストエフスキーのこの作品もまた、かなりの長編であるが、右のように中村は単に焦点化したネリーの悲劇にのみ筆をさいているわけではない。だが、ここでも題名に用いられた「みなしご」の語は、それなりの効果を発してしまふ。さらに、その後の本作関連再話をあげて見ると、この感はより強められるだろう。管見の範囲で示すと、大江賢治『薄幸の少女 虐げられた人々』（『世界名作文庫』一〇六、偕成社、一九五四）↓『薄幸の少女』（『少年少女世界の名作』九六、同、六八）、及川甚喜・文『孤児ネリー』（『少年少女世界の名作文学三三 ソビエト篇一』所収、米川正夫訳、小学館、一九六五）、それにマンガ版として杵淵やすお『ネリーのかなしみ 名作物語』（『少女クラブ』新年号ふろく、講談社、一九五七年一月）がある。ここではこれ以上内容に立ち入らないが、いずれも「孤児」「薄幸」「かなしみ」といった語彙が目立つことに注意を向けおくこととする。

「ネル」も「ネリー」も、大体の再話作品の表紙絵で、もの思わしげな顔立ちをみせている。「ネル」再話系列のマンガ、しかのもゆる『少女ネルの死』（『世界名作漫画文庫』四三、曙出版、一九五三）や岡田晟『少女ネル』（『傑作面白漫画』二二、トモブックス社、一九五四）、また絵小説である『さすらいの少女』（武村志保・文、高橋真琴・絵、パール絵小説シリーズ四、『少女クラブ』十月号付録、一九六

二年一〇月)などを並べて見ると、二つの再話群で共通する要素が見えやすくなる。題名ともども、本づくりの段階での「けなげ」な「少女」の構築は、今後さらに分析をしていく余地があるだろう。

ディケンズの「ネル」に立ち戻ると、映像化された再話としてさらにテレビアニメ作品が作られたことがわかつている。一九七九年十月から翌年五月にかけて、二六回にわたりテレビ東京系で放映された「さすらいの少女ネル」(名曲ロマン劇場)がそれである。残念ながらビデオ化などはされていないようで、今のところ内容は把握できていない。ただ、近年も地方局では再放映されるなどしており、一部にはかなり熱烈なファンがいることがインターネットの検索などからはうかがえる。たとえば「涙なしには観られません」といったきわめて感傷的な書き込みなどがあるところからすると、まさに「少女」の「けなげ」さに対する慣習的というか既成の観念に根ざした期待が、そもそも享受者側にあるとも考えられる。

今回は、問題を把握する手始めとして、三人の再話作品にしばらく、また細かい作品の表現等に立ち入ることなく論を進めてきた。次には他の再話者たちの作品にも触れながら、またもうひとりの「ネリー」再話とも関わらせながら、「少女」の造型に踏みこむことを通じて、児童文学におけるジェンダーの問題を追究していくこととしたい。

※ 本稿の骨子は、日本児童文学学会第四二回研究大会(二〇〇三年十月二六日(日)、大阪国際児童文学館)で発表した。

※ 本稿は、平成十五年度科学研究費補助金基盤研究C(2)「児童文学における翻訳・再話とジェンダー意識」の研究成果の一部をまとめたものである。